アントニーノ・シラグーザ

「愛の妙薬」の主役ネモリーノを歌うのは、日本でもおなじみの人気テノール、アントニーノ・シラグーザだ。シラグーザにとってネモリーノはオペラ・デビューの役であり、彼のレパートリーの〝本筋〟として大切かつ愛している役である。突き抜ける輝かしい美声、豊かな抒情性、抜群の音感で魅了する、シラグーザの「人知れぬ涙」に、いやがおうにも期待が高まる。

いつも大きな喜びを感じながらネモリーノを歌っています

――いまペーザロにいらっしゃるそうですね？

シラグーザ（以下S）●ええ、ペーザロのロッシーニ・フェスティバルで「タンクレディ」に出演します。稽古が始まるのはまだ先ですが、ペーザロには毎年呼ばれるので、家族と一緒に早めに来て夏休みを楽しむ習慣になっているんです。

――それはいいですね。ところで、改めてキャリアのスタートに教えてください。歌手になる前に、すでにギタリストとして生計を立てていらっしゃったとか。

S●そうですよ。私のキャリアはポップ・ミュージックから始まりました。一九八九年に転機があって声楽を本格的に始めたのですが、その前に何人か著名なポップス歌手のギター伴奏者としてツアーに参加していました。その中にはカンツォーネ界のスター、リタ・パヴォーネもいます。十歳頃からギターを弾き始めて、十三歳の時には地元メッシーナで最初のグループを結成しました。自分で弾き語りもしました。十六歳から本格的にリタ・パヴォーネのツアーに伴奏ギタリストとして同行したり、という生活になったのです。一九七九年から二年半ほど続きました。私、ギターも相当上手いんですよ（笑）。

――ギターは現在の歌手活動に役立っていますか？

S●「セビリアの理髪師」でアルマヴィーヴァ伯爵がバルコニーの下でロジーナに歌う場面。普通のテノールのギターは弾きまねなのですが、私は本当に弾き語りができます。ロジーナと気持ちを取り交わす大切な場面ですから、テノール本人が実際にギターを弾けて、演技が自然なほうがいいですよね。

――オペラ・デビューの役は「愛の妙薬」ネモリーノだったそうですね。

S●はい。ネモリーノは、正真正銘、私の舞台デビューの役です。一九九六年にジュゼッペ・ディ・ステファノ・コンクールで賞を獲得した際、歌った演目が「愛の妙薬」でした。観客の前で初めて歌ったのです。場所は、シチリアのトラーパニ。このときのドゥルカマーラ役はロランド・パネライ氏だったのですよ。オペラ黄金時代を象徴する偉大な歌手と組んでのデビューを、いまでも誇りにしています。

――しかし、シラグーザさんはここ数年かなり頻繁に「セビリアの理髪師」を歌っているものの、「愛の妙薬」はむしろ稀ですよね

S●ええ、「セビリア」はおそらく最も多く歌っています。自分のこれまでの声に最適の演目だったこともあります。ですが今、私はレパートリーの新しい扉を開く時期に来ています。たとえば、まもなく「リゴレット」をジェノヴァとバルセロナで歌いますし、ヴェルディ「一日だけの王様」もビルバオで歌う予定です。「カプレーティ家とモンテッキ家」も私のキャリアに最近加わった演目ですね。

私のレパートリーの構築方法は、本筋とする役柄に定期的に戻る、というリズムを崩さずに、でも、経験とともに新演目にもトライしていきます。「愛の妙薬」は本筋の役柄の部類です。巡ってくる回数が少なめでも、いつも大きな喜びを感じながらネモリーノを歌っています。なので東京での「愛の妙薬」がとても楽しみなんです。歌手には、自分の声に変化や進歩、発見をもたらしてくれる仕事が必要なんです。

――新国立劇場のプロダクションは、チェーザレ・リエヴィ氏によるチャーミングな演出です。

S●リエヴィ氏とは、もうずいぶん前に「夢遊病の女」でご一緒したことがあります。興味深い演出をされる方ですね。

「人知れぬ涙」は感動的な愛の勝利のアリア

――ネモリーノを歌うとき、どのような人物像を考えていますか。

S●ネモリーノは田舎育ちの素朴な農民の青年です。まだ若い男の子で、アディーナに恋している自分の悩める状況に解決を求めています。「魔法の薬」の効力を信じきることも、彼の心には、アディーナの心を手に入れるためのひとつの解決の可能性に映るのです。ドゥルカマーラの言葉をストレートに信じてしまう理由はそこにあります。彼は自分のまわりにある可能性にはすべて賭けてみようと必死ですから。「恋」って、そういう状態のことじゃありませんか。そして彼は、心の澄んだまっすぐな青年ですから、ものごとを悪いほうには解釈しません。そんな彼と対照的なキャラクターが、軍曹の地位にあるベルコーレ。この恋敵は、作意によって愛を手に入れようとしますね。ネモリーノは、ベルコーレの言葉さえも信じ、軍隊に入隊してしまいます。この瞬間、彼は自分にひとつの賭けをするんです。軍隊という知らない世界に入る……でも妙薬を買うお金が手に入る、どうするべきか？というね。結果は、真摯な愛が勝利する、ということになるのです。

――演じていて気持ちのいい結末ですね。

S●私にとってネモリーノは、心正しい純朴な青年です。人によっては彼をもう少し「愚かな」イメージで解釈する場合もあるようですが、私はそうは思っていません。賢い人ですが、恋してしまっているというだけです。それから、彼には臆病な面があると思います。普段はあまり大きな声を出さない、おとなしい人です。ところがアルコールが入ると、言うことが大きくなったり、ハッキリしたり。メリハリとして面白い部分でしょう。

――アリア「人知れぬ涙」はドニゼッティの傑作アリアですが、どのように歌いますか？

S●音楽的に傑作というだけでなく、オペラのラストシーン近くになってのアリアですから、かなりしんどいですよ。ですが同時にやり甲斐があります。それは、「愛の妙薬」を知らない人でも聴いたことがある、抜きん出てよく知られたアリアだという点ですね。みなさん、このアリアを聴くのを楽しみに劇場にいらっしゃるわけでしょう？美しく、表現に富み、ネモリーノが一体どういう人物だったのかが明らかにされる、そういう歌です。彼のアディーナへの想いが表現され、最後はアディーナも彼が自分の本当の相手だということに気づく、感動的な愛の勝利のアリアなんです。くどいようですが本当に大変なんですよ。あのアリアまで集中力を保ちながら舞台を盛り上げ、最後にしっかりと歌いきるのは。

――来年の公演、とても楽しみです。

S●一九九八年に初めて日本に行って以来、大きく間を空けることなく、おそらく年一度ぐらいのペースで日本のみなさんの前で歌ってきました。日本に行くことはもう習慣のような感覚です。みなさんが熱心に聴いてくださるのが伝わってくるので、日本で歌うことは私にはいつも喜びです。来年早々にまたお会いしましょう！

「チェネレントラ」より

Antonino Siragusa

イタリア・メッシーナ生まれ。幅広いレパートリーを誇り、イタリア各地の歌劇場や、ウィーン国立歌劇場、メトロポリタン歌劇場、ベルリン州立歌劇場、バイエルン州立歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、ハンブルク州立歌劇場、ベルギー王立歌劇場（モネ劇場）、チューリッヒ歌劇場などに出演。最近は藤原歌劇団公演「セビリアの理髪師」（2011年）や、急遽代役を務めたボローニャ歌劇場「清教徒」アルトゥーロで大喝采を浴びた。新国立劇場には02年「セビリアの理髪師」で初登場し、09年「チェネレントラ」に続き、3回目の登場。